

(第3種郵便物認可)

2022年(令和4年)9月30日(金曜日)

位置

頁

被災者支援 2団体助成

読売光と愛の事業団は、東日本大震災などの被災地を支援する「被災者支援事業」の今年度の助成先を決定した。県内からは、巨理町の一般社団法人「スタンドアップ巨理」と石巻市の任意団体「チャイルドネットジャパン」が選ばれた。

光と愛の事業団

子の居場所、笑顔つくる

スタンドアップ巨理

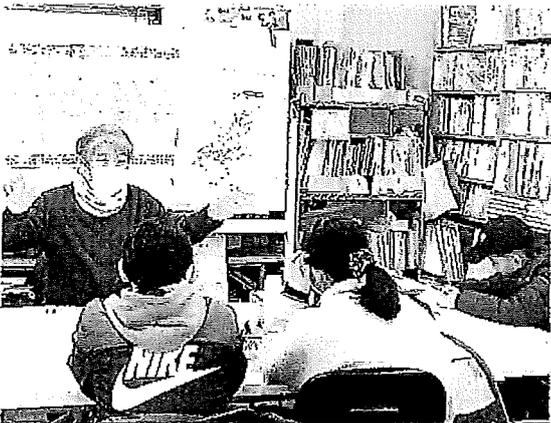
(巨理町)



「オープンシェアハウス181」で子どもたちが準備してきた運動会を楽しむ児童ら(18日、巨理町で)

スタンドアップ巨理は、学習支援や遊びの場の提供などを通じ、子どもの居場所

所づくりに取り組んでいる。助成金30万円は、活動拠点施設「オープンシェア



児童でにぎわう「子ども未来図書館」(石巻市で)(チャイルドネットジャパン提供)

チャイルドネットジャパン

(石巻市)

ハウス181」の賃料に充てる。同法人は、被災地でボランティア活動を行おうと地元の若者が2014年に設立。「子どもの笑顔が復興につながる」と映画の無料上映会などを行っていたが、拠点施設を構え

るようになった17年夏から共働きの親を持つ子どもらを受け入れる活動が本格化した。ハウスは、地元のサークルにも使ってもらっている。サークルとの連携が、子どもたちの新たな居場所づくりにもなっているからだ。

18日には、同法人が開いたイベントの一環で、親子サークルが企画した運動会が行われた。児童4人と母

国から絵本や児童書などが集まり、蔵書は3000冊を数えるまでになった。図書館では、地元の大人たちが子どもに本を読み聞かせるイベントなども開いており、地域の子どもたちから人気を集める。

子どもと本 出会い提供

チャイルドネットジャパンは、石巻市渡波で「子ども未来図書館」を運営している。助成金20万円は、新たな絵本の購入などに使うという。

「本は血液。たくさんあるからいいのではなく、循環が必要」。西沢さんが大切にしている言葉だ。本棚は満杯になったが、子どもたちにもっと多くの本に出会ってほしいと考え、なるべく多くの予算を割いて本を買い足している。

渡波地区は、震災の津波にのまれ、甚大な被害を受けた。同団体代表の西沢砂弥香さん(37)は、震災直後に神戸市からボランティアとして宮城に入った。がれきの山は半年で片付いたが、学校や遊び場は失われたままだった。そこで2013年、子ども未来図書館をオープンさせた。

西沢さんは「ここで育った子どもたちが大きくなり、ゆくゆくは次の世代をケアできるような『循環』ができれば」と抱負を語った。

寄贈を呼びかけると、全

被災者支援 2団体助成 読売光と愛

「読売光と愛の事業団」（東京）が創設した被災者支援事業で、県内からは大船渡市のNPO法人「おはなしころりん」と、陸前高田市の「読書ボランティア ささ舟」の2団体が助成対象に選ばれた。

本を通して 地域再生

おはなしころりん（大船渡市）



学校に届ける本の選書について話し合う江刺さん（左）ら（12日、大船渡市で）

大船渡市内で移動図書館の運営や読み聞かせをするNPO法人「おはなしころりん」は、東日本大震災後、本を通して地域コミュニティの維持や活性化を支えている。

2003年に活動を開始。震災2週間後から避難所で読み聞かせ会を始め、住民同士が交流できる環境を提供してきた。被災者が仮設住宅や災害公営住宅など、度々転居を余儀なくされた中で、場所を変えてお茶会や移動図書館の活動を展開し、地域の結びつきを再生する後押しにも努めた。

現在所有する本は約1万冊。震災直後の同市は校庭に仮設住宅が建ち、子ども

紙芝居 親子に癒やし

読書ボランティア ささ舟（陸前高田市）



親子連れを前に、紙コップを使って「おはなし」を披露する磐井さん（右）（16日、陸前高田市立図書館で）

5000冊。市立小学校の各教室や子育て支援団体、集会所など40か所に月1回訪れ、読み聞かせや本の貸し出しを行っている。助成金30万円は、スタッ

フの物件費や移動図書館に使う車のガソリン代などに充てられる。江刺由紀子理事長（60）は「本は人の支えになり、出会いの場を作ってくれる。今後も安心して笑顔で暮らしてもらうためには、本を通して支え続けることが大切だ」と話している。

「読書ボランティア ささ舟」は、陸前高田市を拠点に2007年から活動するグループで、東日本大震災の被災地で親子に癒やしを届けようと、活動を続けている。

「おはなしころりん」は、被災者たちがのびのびと遊べる空間が少なかった。自身も被災した代表の磐井律子さん（79）は「家や親を失った子どもが多い中、一時でもつらいことを忘れられる空間を作りたい」と考え、3か月後から活動を再開。市内の避難所や学校に加え、

避難者が多かった住田町の小学校まで足を延ばした。現在のメンバーは40〜70歳代の女性9人。手袋や紙コップなどの道具を駆使したり、オリジナルの紙芝居を制作したりと、楽しませるために工夫を凝らす。磐井さんは、「震災から11年半が経過し、被災した子どもが親になる時代だからこそ、親子が一緒にほっとできる場所が必要になる」と話した。

助成された10万円は、新たな紙芝居を制作する材料費に充てる予定だという。